



【編集】  
富山国際大学  
現代社会学部

富山国際大学

東黒牧ニュース

Toyama University of International Studies



## 異文化研修で見つけたライフワーク

タイの少数民族支援を続ける 山崎莉歩さん（観光専攻 4 年生）

2015 年、1 年生の春休みから、半年ごとにタイ北部ナーン県に行き、少数民族ムラブリの人々の生活向上を目指した支援活動を行っている。



2015 年、初めて訪れたムラブリの村で仲良くなった子供たちと

「大学生になったら、海外に行こう」と漠然と思っていた。才田春夫教授の「国際協力・ボランティア論」を受講して、青年海外協力隊のことを学び、「途上国を見てみたい。途上国の役に立ちたい」という気持ちが膨らんでいった。そして、その年に才田教授が始めたムラブリ族の村、ファイユアックでの異文化研修を知り、迷わず参加を決めた。

それまで海外に行ったことはなかった。それが、いきなりタイの山奥に。風呂どころかシャワーもないテント暮らし。日本とはかけ離れた生活をおくるという超のつく異文化体験の洗礼を受けた。

そして、村の許可を得て専用の家を建てようということになり、才田教授が「材料を調達してくる」と一人で街に降りていった。暗くなっても帰らない。参加した学生 8 人は全員が 1 年生で、海外体験はほとんどない者ばかりだった。「死んじゃったのでは、と案じ、心細くなったころ、材木を山積みしたトラック 3 台を従えて才田先生が帰ってきた」。この時の安堵感は忘れられない。

こうした非日常の積み重ねの 3 週間は、貴重な体験となった。

それでも満たされない気持ちも残った。

ムラブリ族の大人たちは警戒して遠巻きにし、接触できたのは子供たちだけだった。しかも、活動はほとんど家作りに費やされ、「まだ、地元の人々の役に立っていない」と思ったからだ。

半年後の 2 年生の夏休みに第 2 弾が行われると知ると真っ先に手を挙げた。以来、毎回、参加し、ファイユアック訪問は 5 回を数える。

次第に大人も心を開いてくれるようになった。名前と呼ばれるようになり手ごたえを感じるようになったのは 3 回目だという。努力の積み重ねがあって初めて相手から信頼されることを知った。だから、「リピートしていない人はもったいない」とも感じている。

共同の水場と川を結ぶパイプの修理は“恒例行事”となった。緩い地盤にブロックを埋め込むなどして道を安定化させる作業も積み重ねてきた。狩猟民族であるムラブリの人々がくれたリスの脳みそやトカゲの料理も食べた。「仲良くなろうと無理したのでは」と聞くと「あの空間で差し出されたら誰もキヤーとは言わない」と断言した。

今はこのプロジェクトの学生リーダー的な存在で頼もしいが、高校時代まで、出不精だし人付き合いも苦手だったそうだ。

「大学の自由な雰囲気では変わった」と、言い切る。

今の願いは、ムラブリの人々が「貧しい民族」というレッテルから解放されること。そのための手段として「良い形で観光地になれば」と思い、観光専攻の知識が生かせないか、模索している。地元で生える葛の一種の繊維を使った伝統の編み物を、何とか売れる商品にできないかとも思案中だ。

今年も 8 月中旬から 3 週間をタイで過ごす。

「卒業後もムラブリの村通いは続ける」覚悟だ。大学でライフワークが見つかった。



2017 年春、子供たちは、山崎さんがやって来るのを楽しみにしている